

防災教育を体系的に位置付ける小学校理科カリキュラムの提案

○小松原 崇^A 加藤 圭司^B

KOMATSUBARA, Takashi KATO, Keiji

横浜国立大学大学院教育学研究科・鎌倉市立西鎌倉小学校^A 横浜国立大学教育人間科学部^B

【キーワード】 防災教育, カリキュラム, 自然観, 小学校理科

1 はじめに

筆者らはこれまで、理科学習を通じた防災教育のあり方について、「地域」に着目する重要性を提唱してきた。子どもにとって「地域」は、生活経験をとおして認識されるものである。この生活空間である「地域」を科学的な視点から捉え直すことによって、防災の視点から「地域」に対する認識を再構成できると考える。

具体的には、H.カロルの **Landschaft** 論の立場から、「生物圏としての地域」と「地圏としての地域」という、2つの視点に立ったカリキュラムを構築していくことが、学校教育における防災教育で必要なことであると考えられる。

筆者らは、これまでの実践において、第5学年理科単元「流水の働き」を通じて、「地圏としての地域」に関する防災との結びつきを重視したカリキュラムの検討を行ってきた。本報では、「生物圏としての地域」の視点から、児童が「地域」をどのように捉えているのかを検証することを通じて、小学校理科における防災教育のあり方について、「地域」の視点にたった体系的なカリキュラムについて検討しようとするものである。

2 方法

(1) 調査対象

神奈川県内の公立小学校第3学年

(2) 実践単元

「昆虫のからだづくり」(全10時間扱い)

(3) 調査内容

「地域」に関する質問紙調査

3 児童の「地域」の捉えとその変化

実践前に「地域」という言葉からの連想について調査したところ、建物(189件)、森や林、坂があるなど自然に関する景観(93件)、地名(82件)、人の存在(29件)を挙げていた。これについては、社会科による学区探検の学習

の影響が考えられる。

本単元は、昆虫の体のつくりの学習をすみか等に発展させ、地域の特徴と結びつけるカリキュラム、すなわち、昆虫を発見できる場所やその食性、体の特徴(擬態)などから昆虫のすみかについて考えさせる内容を扱った。結果、3年生でも学区内の様々な場所の自然環境を捉えることができた。

小学校3年生の段階においては防災教育に直接関わる内容を扱うことは困難であるが、生物圏としての地域の特徴を捉えておくことで、高学年の理科で学習する地圏に関わる内容へとつなげ、防災への意識を「地域」との関わりの中で高めていくことができると思われる。

4 理科学習における防災教育の位置づけ

小学校では、1年生の段階から健康安全の行事として避難訓練が実施され、災害が起きたときに身を守る行動を訓練する。第3学年からの理科学習では、本実践などのように生命に関す

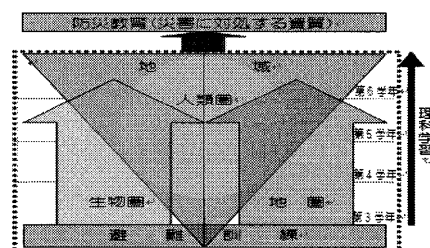


図. 防災教育の体系的な位置づけ

る単元では生物圏、地球に関わる単元では地圏という視点から「地域」を科学的な見方や考え方で捉えることができる。その結果、「地域」は多様な角度からの広がりを見せていくことになり、避難訓練にとどまらず、地域でどのように行動すべきかということにも繋がっていく。このように、理科学習をとおして、生物圏と地圏の2つの視点で「地域」を捉えることで、児童は、防災に関する資質を形成していくものと考えている。